2022年4月17日（イースター） 川越教会

丸山　勉

神さまの定位置

［マルコによる福音書16章1～8節]

安息日が終わると、マグダラのマリア、ヤコブの母マリア、サロメは、イエスに油を塗りに行くために香料を買った。そして、週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った。彼女たちは、「だれが墓の入り口からあの石を転がしてくれるでしょうか」と話し合っていた。ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった。石は非常に大きかったのである。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたので、婦人たちはひどく驚いた。若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である。さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。

[１]　「復活」とは恐ろしいこと

イースター礼拝の日曜日を迎えました。「イースターおめでとうございます！」とまずご挨拶したい気持ちも大きいのですが、それはメッセージの最後に言うことにしたいと思います。と言いますのは、丁度、朝が夜の闇を通過しなければ訪れないのと同じように、やはり「復活」にはプロセスがあり、それが大事なのではないかと思うのです。「甦り・復活」というのは、正に「黄泉から帰る」「死をくぐり抜けて新しい命を得る」ということだからです。

昨日は、女性会の方が何名かで今日皆さんにお持ち帰り頂くイースターエッグを作って下さいました。私は今回思いました。イースターエッグというのは「お墓」なんだなと。外側には無機質に思える「殻」がありますね。先ほど読んで頂いたイエス様の亡き骸を一時収めた墓を思わされます。石の壁で囲まれている。玉子も外側だけ見たらただの白い物体です。でも私たちは知っています。その白い墓から復活・甦りの物語は始まったのです。そしてこれは単にイエス・キリストという一人の方のよみがえりが起こったという話ではありません。この世界が“新生”した、新しく生まれ変わった出来事、私たちはまだその全貌を知らされてはいないのですけれども（この地上にある間は）、言ってみればこの復活という出来事は、天地創造にも並ぶ、第二の天地創造と言っても良い“宇宙的な”出来事だと言えます。これは私たちの思いや理性を超えた驚くべき出来事、恐ろしい出来事です。ですから今日の復活の聖書箇所は何という言葉で終わっているかと言うと、8節の「正気を失って…恐ろしかったからである」という言葉でひとまずマルコ福音書は結ばれているのです。先週私は「十字架」というものに慣れてはいけないのではないか、というお話をしましたけれども、「復活」についても同様です。考えてもみて下さい。あの十字架で血まみれになって殺され、その死んだ体は間違いなく墓に中に葬られ、石で密閉もされたのです。その方がよみがえってあなたがたより先にガリラヤに行っているよ、という知らせに「ああ、そうですか、それで安心しました」というように落ち着いて受け止めることなど出来ない筈です。そしてこれは今に続いていることです。私たちはこの朝、この途方もない神様のわざに、私たちなりに与りたいと思うのです。

[２] 「聖土曜日」を通過して

イースターを恵み深く迎えるためには、実は昨日の土曜日がとても大事なのだと思います。その前日の主の十字架の金曜日の大事さはもちろんです。そして言うまでもなく今日の日曜日はイエス様の甦りの日曜日。その前の日。伝統的な言い方では「聖土曜日」とも言うことがあります。この日は、この日だけは、言ってみれば「神の子が死んだままの日」なのです。「真に神の沈黙した日」「暗黒の一日」と言っても良いと思います。今日の箇所の直前の15章の44節以下にはこうあります。―「ピラトは、イエスがもう死んでしまったのかと不思議に思い、百人隊長を呼び寄せて、既に死んだかどうかを尋ねた。そして、百人隊長に確かめたうえ、遺体をヨセフに下げ渡した。ヨセフは亜麻布を買い、イエスを十字架から降ろしてその布で巻き、岩を掘って作った墓の中に納め、墓の入り口には石を転がしておいた。」

イエス様は死者となり、墓の中に納められ、封印されました。閉じ込めたのは誰か。ピラトであり、ユダヤの律法学者であり、祭司長であり、群衆であり、また、私たちです。「十字架につけよ」の声を浴びせ、お前など要らないと判決を下したのです。十字架を見る時に、私たちは己の自己中心性（罪）と向かい合わざるを得ません。墓に入れるとは、「イエス様、さようなら」と言い、少しは心が疼くかも知れませんが、やがては思い出の一つになっていく。イエスを墓に納めるとは、あなたの最終地点、定位置はここですよと人間が告げるようなものです。その時つまり金曜日の日没から復活の朝まで、一日と少しでしょうか、この土曜日は、神様が沈黙している、何も起こらない（かのように見える）時間なのです。

ある方は言います。「私たちの人生の多くは、聖土曜日の「間の時」です」と。どういことかと言いますと、例えば、私たちは色々な不安や、突然足元が崩れるような状況に追いやられることがあります。「病」や「死」の恐怖に一人で直面しなければいけない状況に置かれたり、家族の者が大変な試練を受け自分の無力さを突き付けられたり、或いは仕事を失ったり、経済問題で途方に暮れたり、信じていた者から裏切られたり、或いはあのペトロのように自分の罪過ちの故にもう顔を上げられないような思いに沈み切ってしまうような闇のような時間…人生はそんな「まるで神様が沈黙している」ように思え、自分は神様に見離されたのではないかと思ってしまうことがあるということです。ここから出られるのか…良い方向に導かれるなどと思えないことも人生にあると思います。それが「聖土曜日」の状態だと言うのです。まるで時が止まったかのように思えてしまう…。

でも、聖書は語ってくれているのです。神様は沈黙を続けられない。時が止まったまま、主イエスは墓の中に閉じ込められたままで終わるなどということを、神様はなさらなかった！それが十字架から「三日目」です。神の子を殺し、勝利したかのように思えた人間の罪、人間の悪は、朝がやって来て墓の前の大きな石が無くなっていたように、私たちの、そんな神様に対する悪事も、そして不信仰も吹っ飛ばして下さったのです！それは、死の中に留まり眠っていた時間、神様の支配が見えなかった時間の巨大な歯車がギッ～と動き始めたということです。聖土曜日という「間の時」も、それが終着点ではなくて、イエスの復活によって、上から光が射します。そしてその光は人格を、「言葉」を持っています。神などいないと決め込んでいた不信仰な私たちに対して、神様の側から呼びかけ、語りかけて下さるのです。墓の中にいた天使は婦人たちに言いました。「あの方は復活なさってここにはおられない。あの方は、あなたがたより先にガリラヤに行かれる」。

―復活とは私たち自身の「新生」です。そして、神様の「赦し」の中に生き始めることです！私たちは復活のイエス様と出会う中で、あの「私には神などおられない」と思っていた時、誰よりその私と一体化して下さっていたのは主イエス・キリストであったということを知ることが出来るのではないでしょうか？

[３] 復活の主は今どこに？

以前にもお話したことがあるのですが、2010年に南米チリの奇跡と言われた出来事がありました。チリ郊外のコピアポ鉱山で落盤事故が起こり、33人の鉱夫たちが閉じ込められてしまったのです。地下700メートル位の所にです。初めの18日間は全く地上と交信が出来ない状態でした。突如「神がいないかのような」所に追いやられたのです。しかし彼らは絶望しませんでした。その33人の大半は信仰を持っていて、牧師の仕事もしていた者もいました。鉱夫たちは幾つかのグループに分かれ、励まし合い、二日に一度の食料も分ち合い、必ず昼の12時と夕方の6時には祈るために集まったそうです。天からの光が射さない闇の中の礼拝です。まるで「聖土曜日」ですね。そしてその土曜日は、土曜日で終わらなかった。地上との細いパイプが作られ、そこから食料や飲み物が、またポケット聖書が人数分送られていたと言います。彼らはずっと希望をもって待ち望み、閉じ込められてから約70日後に全員救出されました。その時彼らは皆揃ったTシャツを着ていたと言います。そこには「ジーザス」という言葉と、詩編95:4の次の言葉がプリントされていたと言います（シャツはそのパイプを通して運ばれてきたものです）。その言葉は「深い地の底も御手の内にあり、山々の頂きも主のもの」です。そして、救出された鉱夫の一人がこう言ったそうです。―「地下にいたのは33人ではなかった。34人だった。神が我々と共にいたからだ」。

「あなたがたは墓の中に主を納めたと思っているが、ここにはおられない」。こんな卵の殻の中に納まるようなイエスではない。その殻の中の神なき絶望も体験しているイエスは、今そんな殻を打ち破って、あなたがたより先にガリラヤに行っているよ、と言うのです。ガリラヤ。イエスとの出会いの原点、そして私たちの平日の営みの場所です。イエス様は教会の中にさえ閉じこもっていません。復活のイエス様の定位置はどこなのか。墓の中にはおられない。今は自由な方としてどこにいるのか。私たちの傍らです！それ以外でありません。陰府にまで降られたイエス様は、私たちの人生の、様々な試練も労苦も悲しみも共に経験しながら、「さあ一緒に行くぞ」と、私たちを新しい時間に中に踏み出させて下さるのです。

本当に復活の主のお姿にまみえるのは、私たちの生涯が終わってからなのでしょう、きっと。しかし、私たちはその日を先取りして、望みを持って日々を生きることが出来ますよね。主は最後の敵、「死」に打ち勝って下さったのですから。イースター、おめでとうございます！皆さんの上に、主の祝福が豊かにありますように。お祈り致します。

神様、このご一緒に復活の恵みに与ることが出来、心より感謝致します。もはや八方塞がり、先など無い、と自分の中に「墓」を作ってしまう私たちです。しかしその「墓」に、主イエスは私たちと一体化して共にいて下さり、そして私たちの手を取り、光の中に新しい人生を与えて下さいます。私たちを覆うのは闇でも死でもなく、光であり、命です。どうか、私たちのこの人生を肯定しながら歩ませて下さい。今も苦しみ呻くこの世界に、特に、ウクライナの市民の方々に今この時、あなたが共にいて下さいますように。罪深いこの世界を救って下さい！復活の主イエス・キリストのお名前によって祈ります。アーメン。